

B-9 山元町笠野地区 2012年12月31日(月)・2013年1月1日(火)

報告者名	稲澤 努	被調査者生年	① 1956年(女)
調査者名	稲澤 努	被調査者属性	①八重垣神社宮司 (B-1・B-6・B-7 話者)
補助調査者	なし		

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

- * 話者② 1939生(男)、話者①のイトコ
- * 話者③ 1947生(男)、話者①の姉の夫

話者について

話者①は八重垣神社宮司。昨年のB-2などの話者と同一人物。話者②は話者①のイトコで町内にて電気メンテナンスの仕事をしている。父が営林所の仕事をしていて中国黒河に居住していたが、終戦時6歳で引き揚げた。それ以来山元町に住んでいる。話者③は話者①の姉の夫。山元町花釜地区出身。大学入学までは花釜に住んでいた。

大晦日から元旦にかけての活動（話者①を中心に）

話者①の夫を中心に31日午前中から発電機の準備などを始めていた。話者らは夜8時くらいから仮社務所に詰める形で待機。来客には甘酒などを振舞っていた。23時50分ころから10名ほどの参拝客の前で話者①がご祈禱をした。その後、0時が過ぎるのをラジオで確認してから参拝した。去年も取材に来た読売新聞記者がその様子を写真撮影。2時過ぎまで参拝客には甘酒を振舞い、たき火にあたりながら歓談しつつ、参拝客に挨拶。去年に比べると参拝客は少ないが、現在ここには自動車で来るしかなく、酒を飲んでしまうと来られないので、今夜少ないのは仕方がないだろう。3時ころからは話者②③およびその家族らはいったん帰宅し、話者①のみがプレハブ内に待機。3時半ころに2家族ほどやってきて御札などを買い求めていった。7時前に周囲が明るくなり始めると海岸で日の出を見るものや参拝客がやってくるようになった。その後10時からは区の祈願祭を行う。区の行事なので区長、副区長がやってくるほか、総代の組織からは総代長のみがやってくる。その後日が暮れるころまで神社で待機する。

新しい賽銭箱、その他の支援について（話者①）

賽銭箱は昨日東京の下谷神社から連絡があり、急な連絡だったので自分は立ち会えなかったが、持ってきてもらった。他の神社から被災地に寄贈されたもので、もっと大きなサイズのものもあるとのことだったが、社殿の大きさに比べてあまりに大きすぎる。今回もらったものも、社殿と比べてちょっと大きいので、正月が終わったら元に戻すつもりである。とはいえ、去年は賽銭箱が小さすぎて正月期間にお賽銭が箱からあふれてしまった。ちょうどいい大きさを探すのもなかなか難しい。東京下谷神社からは、この神社の他、岩沼の神明社、新地の神社にもお賽銭箱が運ばれた。

昨年は、お神輿の修理、祭の担ぎ手の装束などの費用を支援してもらえて大変助かった。今年はできれば太鼓や賽銭箱（祭りの時に神輿と一緒にまわるもの）もほしい。また、このたき火をした際の薪は、テラセンさん（お寺災害ボランティアセンター）が運んできた。彼らはトラック1台分の薪を用意し、各寺、神社などに配布した。普門寺の住職さんは大変熱心な方で、被災した年の夏などは、おひとりで復旧作業をしていた。そういう人のところにはボランティアも集まる（テラセンは普門寺を拠点に活動）。

正月、5月、9月のオヒマチ（話者①）

オヒマチとは宮司が氏子宅を訪ねることで、正月、5月、9月の3回行う。12月の御札配布を含めると年4回氏子宅を訪ねることになる。訪問するのは250軒ほどで、〇〇家には8日に、△△家には10日にといった具合に家ごとにほぼ日にちが決まっている。たとえば正月の場合、3が日やどんと祭の日などを除いた20日間程度を費やす。ご祈祷自体は一軒5分から10分程度。ただし、挨拶やお茶のみその前後を入れるともっと長くなる。オヒマチは氏子との普段のコミュニケーションの方法として大事なものであった。畑で作業している方などはいちいち家には戻らず、「カギはかかっているから」と宮司が主人不在の家でご祈祷して帰るような場合もあった。また、長老宅を訪ねたときなどは過去の習慣や地区の様子などについて長老の話の聞いたりもして、メモをしていたが、津波で流されてしまった。ここ以外に柴田などでもオヒマチをすることはある。ただし、基本的には専属の神主でないと難しい。

話者①の兼務神社とその祭について

兼務神社は、南から順に山元町内では、合戦原神社（合戦原地区）、天神社（高瀬地区）、北辰神社（小平地区）、雷神社（大平地区）、亘理町内では八幡神社（吉田（俗にいうオカ吉田）地区）、山神社（浜吉田地区）。かつて、これらの神社の祭は新暦4月3日であった。現在では北辰と八幡は4月3日を守っているが、あとは土日になった。北辰は夜籠りをするので、話者①は2日に来てほしいといわれている。また、北辰は秋にも祭もっており、11月2日が宵祭り、3日が祭である。八幡は氏子数30戸ほどで、朝の清掃には皆そろっているようだが、お祭には総代しかいない。これまで話者①はお祭に行っていたが、朝行くことも検討中。他の神社は4月3日前後の土日に行く。特に子供みこしなどはそうでないと人数が集まらない。

雷神社は大平地区の山の上にホコラがある。道がなくなってしまっていて、よくわかる人と一緒にないとたどり着けない。山の中腹の鳥居で氏子たちが朝6時ころ掃除をするのにあわせてそこでご祈祷をする。

八重垣神社以外はさほどこの震災での被災はなかった。山神社は社殿が被害を受けたが、大工の総代がいて修理した。ただし、山神社の氏子数は被災の影響で減ってしまった。

七社会について（話者①）

七社会は、兼務神社七社の総代の親睦を図る会である。登録メンバー35、6人で、毎回30人近く集まる。5月に総会を行い、秋に研修旅行か交流会（1年おき）を行う。区長＝総代というところも多いため、メンバーは区長会などでも会っていて顔なじみである。特に利害関係もないので仲がよい。ただし、オカとハマで気風の違いはあり、もともと貧乏な地区だったハマと、ゆったりした大旦那が多いオカでは、旅行先の宿泊先をどんな料金のところにすべきかなどで、意見が分かれることがある。

かつての祭

話者②によれば、昭和27、28、29年ごろ、お天王さま祭は「喧嘩神輿」だった（ここでの話は神輿をぶつける一般的な喧嘩神輿ではない）。亘理、角田などから来た「他国もの」がきて喧嘩をした。武器は使わず、抵抗しなくなったらそれ以上殴らないなどの流儀があった。

話者③は、笠野の隣の花釜は「喧嘩神輿」だったという。家の庭に入り、家にぶつけたりもして、ご祝儀、お酒をもらった。それに対し、話者②は、それは笠野も同じで、子供が生まれたり、結婚したりした家は特に「わっしょいわっしょい」して、多くご祝儀をもらったという。逆に葬式があった家などの前は静かに通った。どの家が嫁をもらったか、亡くなった人がいたかなどは、「先導」が全部知っていた。酒はお休み処で飲むというだけでなく、担ぎながらも飲んでた。以前意地悪な駐在がいて、住民がハセガケの竹を車に乗せてちょっとの距離を運んでいるのを交通違反として取り締まったりしていた。祭の時に交通整理をしていたその駐在にわざと神輿をよせて威嚇したら、そのあとその駐在はおとなしくなった。

話者②によると、神輿は、長男二男などは関係なく、男全員が担ぐものだった。もちろん、病弱な人は担ぐ位置



写真1 年越し寸前のご祈祷



写真2 初詣の客に甘酒を振る舞う

を配慮するなどとはしたが、基本的にはサラリーマンも病弱なものでも担ぐ。ただし、昔は、たくさん人数のいた青年団が担いでいたので、そうでないサラリーマンの話者②は担いだことはない。御輿を担ぎ始める年齢に関しては、昔の農家は中卒が多かったが、上がつかえていたので18才くらいからだろうか。

話者①によれば、「喧嘩神輿」とは神輿同士をぶつけ合うものである。話者①が兼務している総代たちの話として紹介するところでは、天神社では、町内同一で4月3日にやったので、途中で神輿が出会うとぶつけ合ったという。「おれたちは絶対に負けなかった」と総代たちは言っているらしい。その頃は、袴をはいて担いでいたが、袴がぼろぼろになっても祭なら怒られなかったそうだ。それは、50～60年ほど前の現在の総代が若い頃の話だといひ、話者①が若いころにはもうやっていなかった。

また、話者②によると、お天王さま祭は近郷近在から人が集まり、今でいう合コンだった。男女がホッキ船で朝まで過ごすといったこともよくあった。小学生のころは祭が近くなるとウキウキしていた。当時学校は半ドンでおしまいだったが、家に帰るとすぐ神社に来た。その時間には屋台が準備を始めており、彼らは自分の持ち場に木くずを敷いて氷をおいて…といった作業をしていた。

昭和20年代前後の笠野、花釜の生業（話者②、③より）

昔この辺りでは塩を作っていた。昭和27、28、29年ころは、八重垣神社ら南に1キロメートルほどのところに製塩工場があった。そのころは、まだ船もあった。陸につけるときは、枕木がひいてあり、その上を引いてワイヤーに巻きつける。自分たちも手伝った。当時船ではマンガ（鉄の爪のようなもの）でホッキ貝を採ってきて、子供だった自分たちは売れないようなホッキ貝を捨ったりもらったりして食べた。ニシン（この辺ではサドイワシといった）も採っていた。ホッキのほか、大漁の時はサバ、スズキなどももらった。そのころは、村の中でも漁師は既に少なかったが、船主とそれに雇われが3-4人いる形だったと思う。話者③の実家は網元として魚を採っていて、魚を塩漬けにするために、塩も作っていた。漁が盛んだったころは、山西（やまにし、角田などを指す）に行商に行っていたようだ。背中に背負っていったので「しょいっこ」といった。

話者③が小さい時にはもう既に糸紡ぎをするだけでカイコは生産していなかったが、それ以前はカイコも飼っていた。自分の家に限らず、山元の海辺では、魚、塩、カイコという家が多かった。この辺は谷地（ヤチ）だから。谷地という地名は今でも残っているが、須賀パタ（海沿い）は農業にはむかない。とくにコメなどには向かない。今でいえばトラクターの代わりで、牛も飼っていた。小6まで自分が世話をしていた。朝3時に草刈に行き、その草を牛小屋へ持って行った。自分は二男だが、父は体が丈夫な自分を家の農業担当にと当初は考えていたようだが、のちに3町歩（このあたりでは狭い方ではない）の土地ではこの先農業だけで食べていくのは難しいと考え、それから急いで受験勉強をし、大学に入ってサラリーマンになった。

昭和30年前後の海や田畑の生態系と暮らし（話者②③）

月夜ガニという小さなカニを、月の出ている晩に、たいまつをもって浜に行き、カニをとりバケツに入れて持ち



写真3 笠野の海岸の初日の出



写真4 東京の神社を通じて寄贈された
賽銭箱と仮の社

帰った。甲羅もやわらかいので、つぶしてカニみそにした。また、ボウフという植物も採れた。これはスミソなどにして茎を食べる。今は高級料亭の味になってしまったが、昔はたくさんとれた。また、海岸の水がきれいだったので、水深1メートル50くらいまで見えた。ヤスでついてカニをとった。また、アメリカザリガニも煮て食べた。寄生虫がいるから半生はダメだ。姉にはそもそも火を通して危ないから食うなど言われた。また、ウナギ、ナマズなども採れた。針に大きいミミズ（ブタミミズ）をつけて、夜刺しておく朝にはウナギがかかっている。

冬は田が凍るので、小学校まで竹製スケートで行った。竹を切って針金を通すとよく滑る。五寸釘を使って竹でストックも作った。水の深いところほど氷が薄いので、落ちることもあった。そんな時は田畑でたき火をして乾かして帰った。たいてい仲間のだれかがマッチは持っていた。サツマイモやジャガイモを畑から持ってきて焼いて食べたりもした。

地区内の班や組織について（話者①）

笠野地区には班が15あり、小さいものは10世帯、大きいもので22世帯ほど。地理的まとまりで構成されており、「隣組」ともいう。年に2回ほど、班で親睦会をした。特に210日あたりの時期に「ムラヒマツ（村日待ちの訛ったもの?）」とって親睦会をした。班長は2年交代。世帯の多い班では一年交代のところもある。班長の仕事には、配布物関係（広報、回覧、亡くなった人のお知らせ）、集金（歳末助け合いなど）、地区内の草刈、井払い（排水溝掃除など）の差配などがある。お金のいる班ならそうした作業日に支給するパンや牛乳の準備もする。また、月に1回班長と区長の集まりがあり、公会堂に集まっていた。

「1から3班がひとつの契約講」といった、班の集合体の形で契約講があった。昔は自宅葬の場合にお葬式の手伝いをした。その際には男性がシドウ（？）作りや通夜告別式受付。女性は台所で来客、あるいはお手伝い要因用の食事準備などをした。

また、年長の総代からではなく、同年代から声掛けしたほうがいいということで農協青年部に神輿の担ぎ手を依頼していた。農協青年部は、その後4Hクラブへ移行した。そのほか、地区ごとに消防団、地区ごとに1、2名選出する（交通）安全協会、イチゴ農家の集まりである園芸クラブなどがあった。その他、若妻会もあった。40歳くらいまでの奥様の集まり。奥様盆踊りがあり、地区の盆踊りの時に披露していた。

話者①が長老から聞いた話では、かつては地区内の石碑を毎月1日と14日に1時間ほどかけて回っていて、順路もあったという。男女の山の神、蚕神、金華山などの碑であったという。その後、こういった石碑の一部は神社に集められ、一部は今もある。また、女性の山の神講があり、安産、子育ての神である山の神を拝む。話者①自身は参加したことはないが、決まった作り方でつくる「変な食べ物を食べる」という。かつては金華山講、月山講な

どもあった。月山は登るのも大変な山だったので、無事に登って帰るまで、行った人の無事を祈っていたという。

地区と神社の今後（話者①）

仮設住宅に見学に来た他県の小学生が「こんなところに暮らして可哀そう」と泣いたのに対し、「自分たちはそんなに可哀そうなんだろうか」という氏子がいた。仮設住宅でも、新しい人間関係ができて上手くやっている人もいる。みな早く家には帰りたいが、周りに誰もいないところに帰るものまた不安。「どうして戻りたいか」といえば、利便性だけではなく、もとの人間関係、もとのコミュニティの重要性といったものが関係してくると思う。震災後、大河原や村田へ移った人もいるが、そういう人に、「新しい土地で氏子になるものなのだが…」というようなことを説明しても「その土地の神様の氏子になるのはいやだ」という話を聞く。お祭などの機会にここで集まり、懐かしく話をする…。今はそういう場である。

とはいえ、震災前の場所にはほとんど住んでいないので、祭の際の氏子からの収入はもうない（今年は以前のような集金はしなかった）。もちろん、結果的にはみなご祝儀をもってきたが…。宵祭の花火も瓦礫処理で潤った業者が多く寄付を出したのでできたが、それがずっと続くわけではない。それぞれ「定地」につかないことには、その先に話は進まない。総代も今後の収入についての心配はしている。